

Title	N. Glueck, Rivers in the Desert, a History of the Negeb, 1959をめぐって
Sub Title	
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1962
Jtitle	史学 Vol.34, No.3/4 (1962. 3) ,p.166(420)- 175(429)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19620300-0166

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

みよかるべし、同く二月廿日、四月廿一日、閏五月廿三日、七月廿三日、九月廿四日、十一月廿五日これらの日に子がやどりさへせねば申分なしと心得べし、

天明丙午の頃も世上に専ら右の俗説をいひふらしたるによりて、時にのぞみし産婦は、大きにこれをうれへたり、中に愚なるものは、あらぬ事仕出て、一命にもかゝわることのありしときく、無難に生めるも生しやちがい丙午をかくさしむ、あゝなんのわけもなき事に、かくまで苦勞するは實に憐むべし、今、諸人の迷をはらし安心に子をあらしめんがために、此さとし書を施印となして、弘るものなり、これを得たる人は、さらに大きくなして、目立べからん所へはり付たもふべし、それを見る人、きく人せんくりに遠近人をさとしたまふべし、これ大なる善根功德なり、なを、くわしくは丙午をさとし文といへる一冊をあらはしおけり、求めて見るべし、これ又施本なるものなり、

弘化二己年八月十二日

泉州堺南中之町

施主何某謹誌

—N. Glueck, Rivers in the Desert,

a History of the Negeb, 1959

をめぐって

小川英雄

(一) 本書は紅海のアカバ灣と死海との間に横たわる荒地ネゲブ地方の古代史を聖書考古學 (biblical archaeology) の立場からまとめたものである。當地に對する歴史的關心は (a) エジプトとアジア諸地方との間の交流の結接點としての古代オリエント史上に於ける役割 (b) 肥沃な新月地帯の最南端に位置する沙漠周邊地域として、遊牧民の定着運動の波が觀察されること (その代表的な例が、ヘレニステイク時代のナバテア人) (c) 舊約聖書の傳承のうち、ネゲブに關係のある事項 (アブラハム一族のカナン侵入、モーセへのヤーヴェ顯現、ソロモン帝國領等) の考古學的證明、の三點が考え

られる。

當地は既に一九一三年に、Ur の發掘者 Sir Leonard Woolley と T. E. Lawrence (of Arabia) との半學術的探險によつて調査されたが、⁽¹⁾純粹に聖書考古學の立場に立つ組織的な發掘調査は、過去三〇年間、特に一九五一年以來數シーズンにわたつて行われた Nelson Glueck 隊のそれである。⁽²⁾その成果は Bulletin of the American Schools of Oriental Research に順次發表されたが、⁽³⁾本書はそれを更に一般の讀者にも分る通史の形にしたものである。⁽⁴⁾

著者はアメリカ人のユダヤ教徒であり、Rabbi の資格を持つ、Hebrew Union College と Jewish Institute of Religion の指導者である。そのような立場は本書の修史にも明瞭に反映しているが、考古學者としては、Albright 學派の一人として American Schools of Oriental Research の理事の地位を占める。⁽⁵⁾この學派の見方は本書でも支配的であるようである。以下に於いて、まず本書の内容を概観し、次に聖書考古學の問題と著者の歴史解釋の方法の問題と云う方面から省察を加え、最後にそれと関連させながら、史學、三三の三・四

の私の論文以後に、ナバテア人の社會、特にそのネゲブに於ける農耕生活についての N. Glueck と Philip Mayerson の間に行われた論争を紹介したい。

本書の骨格を成すネゲブ地方の年代は、便宜上次のように分けるのが、以下の考察に於いて都合がいい。(a) 舊石器時代・中石器時代(西紀前六〇〇〇年以前)(b) ネゲブ地方の西側にある Nitsanah 涸河の石器群で確認される新石器時代(西紀前六〇〇〇—四五〇〇年)を経て、Beersheba 近郊の Tell Abu Matar と Arabah 涸河の北側にある Feinan などで銅器文化が誕生した金石併用時代(西紀前四五〇〇—三二〇〇年、特にその後期)(c) ネゲブ地方全域に定住集落が確立したらしい青銅時代中期(I)(西紀前二一〇〇—一九〇〇年)(d) ヒクソスの侵入等の混亂期の後に現われる鐵器時代(II)(西紀前一〇〇〇—六〇〇年)(e) ナバテア・ビザンチン時代(西紀前二世紀—後七世紀)。Glueck の調査は以上のようなおよその年代を確認したばかりでなく、その間に氣候の變化は殆んどなく、定住の時代的波⁽⁶⁾の原因はここでも、人間社會の側に求められること、特に西紀前第四千年紀以來、「進んだ農耕文明」が次々に起

つたことを確認し、オリエント世界を結ぶ交通の要衝として、當地のルートが推測可能になつたこと、ナバテア人の重要な歴史的役割がこの地方でも證明されたこと、等々の成果をあげた。以上は上記 Bulletin の諸報告の中で解明された諸點であるが、本書では更にそれに加えて聖書考古學の立場を打ち出し、ネゲブ史そのものと云うよりも、ネゲブ地方に於ける聖書關係の事件を前面に押し出す。即ち、著者は聖なる土地の一部であつたこの地方がいつのまにかに“terra incognita”なつてしまつた次第を述べ、その再発見こそ自分の使命であつたことを明かにし、考古學的な立場だけで、發掘物の解釋、當時の社會の再現をすることはせず、その代りに、上記の各時代、殊に聖書以外には文献を缺くナバテア以前の時代の各文明について、その擔い手を聖書中の人名・地名・出來事と結びつける（即ち、identification）。この點に於ける Glueck の態度は非常に點が甘く、およそ結びつきそうなものすべて結びつける。例えば、最近發見されたパレスチナ原人（Palaeoanthropus Pales-tinensis）の子孫は、ケニ人等後に聖書のネゲブ地方に見出される諸族であり、モーセはそこから妻を得たのだ

から、イスラエルの民とかの原人は血縁關係にあり、従つて又、原人の宗教（！）も本質的にはユダヤ教であつた、と云う説が登場する。同様に青銅器時代中期のネゲブ地方はアブラハム一族の滞在したところであり、例えば、Bir Rekhmeih の遺跡はかつてアブラハムたちが野營したと信じられる。モーセやソロモンについても全く同様な肯定的記述で一貫している。しかし、實際には、このような identification を積極的に裏付ける證據は Glueck によつても見出されなかつたのである。それ故、この方面の著者の努力を取り除くと、ネゲブ地方の古代史はほゞどのようなものであつたのだろうか。まず青銅器時代の定住集落は、すでに全ネゲブに普遍的な様式を持つていたらしいが、城壁で圍まれることなく、未だ國家や階級の無い時代であつた。そして、上記の礦物資源が利用されていた他に、農耕では簡単な貯水池や耕地整備（terracing）が行われ始めた。次の定住の波、鐵器時代が來ると、諸遺跡の周圍には強固な城壁があり、又丘陵の頂には交易ルート守備のための城塞が設けられた。諸産業の生産性が増大した跡が伺われ、灌漑技術に大幅な進歩があり、後世のナバテア人の農耕生活

の準備をする。人々は以前には水のあるところに定着せざるを得なかつたのが、今度は定着地に水を引くことが出来た。城壁は、貿易等による富の増大、それにともなう強力な支配者の存在を意味するから、それはある程度までソロモンの榮華として伝えられている聖書の傳承と對應しているのである。しかし、聖書の人名がようやく考古學的に證明されるのは、ユダ王國の一王 Jotham (740—735 B.C.) の印章がアカバ灣頭の Egiun-geber で発見された時である。

次に出るナバテア・ビザンチン時代についての記述はやや異つた色彩をおびている。なぜなら、ナバテア時代はすでにヘレニズム時代に屬するので、もはや聖書には殆んど文献がなく、聖書とは逆に、本來史書として書かれた古典作家たちの記事(9)がかなり残つている。即ち、聖書考古學としてでなくても、考古學と文献資料との結合が可能になるからである。この相違は本書中の考古學の地位に大きな變化を與えている——即ち、考古學はナバテア期以後に於いては、ネゲブ地方を支配した聖なる民の偉業の説明者であることを止め、ネゲブ地方で生きたネゲブの諸民の歴史の説明者となる。しかし、その場

合でも、考古學的證據と文献との結合方法について、問題は依然として残つている。次に、この點とナバテア時代のネゲブ地方史とについて述べよう。

(二) まず、ナバテア期以前の聖書考古學に於ける聖書と發掘結果との identification の問題である。Glueck の結合方法の根底には、(a) 聖書中の人名・地名・出來事の史的實在性に關する確信 (b) 自分の踏査した時に見出した景觀(即ち、topography—この點に關しては、Glueck の仕事はかなりみごとである) と聖書中の當地の景觀との合致 (c) 致聖書の地名と發掘された地點との一致の可能性とそこで起つたと傳承されている出來事や活動した人物の實在の可能性との同一視、以上三つの點があるように見える。これは他の聖書考古學の書物でも同じであるが、他の文献資料を考古學的成果と identify する場合よりも、假説性がはるかに強く、結合の論理としては軟弱であるとしなくてはならない。Glueck 自身の方法論的立場は、本書の一節「聖書は正しいか」(10) に述べられている。それによると、まず考古學は聖書中の神學の説明とは無關係であること、聖書そのものも史書ではないことを

認めるが、同時に「殆んど信じ難い程の歴史的記憶」がその中に臆されている。なぜなら、これまでの考古學的發見は聖書の言及と矛盾したことがない。従つて、Glueck によれば、これまでの考古學的發見に屬していないモーセやアブラハム、その事蹟、更にはネゲブ地方に與えたその“*impact of personalities*”も、「信じ難い程の歴史的記憶」に組み込まれ、史實とされる。要するに、聖書中に歴史記述の形で存在するもの（神學も含む）は、考古學的發見などとは關係なく、すべて史實として肯定される。陶器・地形・土質・鑛物資源・風土・諸生活遺物等の考古學的證據を *a priori* に設定された聖史と *a posteriori* に結合させる以上、聖書の眞理が考古學と對立することは永久にないであろう。それは考古學が聖史の奴婢であるからであり、西洋中世に哲學が神學の奴婢であつた限り両者が矛盾しなかつたのと同じ事情である。

さて、上記の Glueck の *identification* の三つの根底が、客觀的な證據によつて支えられないことは明らかである。従つて、その點を正當づけるために、著者は一種の現地體驗の如きもの、考古學的感情移入のようなも

のを強調する。即ち、聖書の或る記事はネゲブからの發掘物のこれこれに當る、と直觀する、主觀主義的色彩が濃く、その結果、學問的客觀性の代りに主觀的な對象との共感・融合を説く一九世紀ドイツの舊式の歴史觀と似てきていることは注意を要する。そして、このような意圖と方法が良心と妥協するためには、文體がすべて假定的な表現になるのは止むを得ない——“*could have—ed*”, “*may have—ed*”, “*it is possible that*”, “*be supposed to have—ed*”……これ等のまわりくどいあいまいな表現と聖史の *a priori* な斷定的承認は矛盾しないの（12）だらうか。神學的文献と考古學的痕跡との盲目的結合はかつての日本の皇國史觀古代史を想起させる（13）。日本では、戦後かなり徹底した批判が行われ、考古學の主體性が回復され、兩者の認識論的價值や限界にも反省が加えられ、その結果、一部の者の意圖する文献中の神話的要素と史實との混同は常に強力な抵抗に會つている。和島誠一氏の方法論を参照させていた（14）くならば、まず考古學的方法で解明しうる社會の部分——例えば、生産手段としての道具など、自然と社會との結接點——を考え、古代社會の發展史の觀點からそれを位置づける時、我々

は「古代史の中心課題への切り込み」さえも考古學の立場から可能である。この場合、文献資料は考古學的資料とは或は若干の部分で重複してはいても、古代社會の異つた部分を反映しているのだから、その兩者は排除しあうものではなく、重複している對象の部分に於いて、却つて逆に、客觀的な結合 (identification) の根據が保持されるであろう。即ち、結合の基準は古代社會の歴史的構造の追求の中に求められるべきで、それを抜きにして、例えば、聖書中の個々の事象と考古學的資料の個々の事象とを直感的に結びつけるのは非科學的であろう。聖書考古學にも同じことが云える。その方面では、一方に Albright を中心とする學派があつて、本書に見られるような方法をとつている。そして、他方には、text criticism を中心とする A. Alt, M. Noth の學派があり、ヘブル史に於ける考古學の寄與を低く評價する。しかし、共に聖史の目的意識を基準にしていることは共通であり、我々はむしろ上記の日本考古學の反省によつて、兩者を獨立した歴史の方法として徹底させ、それぞれが解明する對象を古代社會の發展的構造の中で正當に位置づけることに於いて兩者の對立の解消を目ざし得

る立場にあるであろう。⁽¹⁵⁾ それには、兩者を技術的に徹底させる一方、考古學に對する聖書の過重負擔を排し、文献資料の非神話化を推進すべきである。Glueck の本書に於ける修史では、その點が恣意的に扱われていて、文献資料の公正な使用さえ行われていない。例えば、鐵器時代 (II) について、聖書を最大限に用いている一方では、聖書とは逆に本來史書である Herodotus 第三卷の當地方に關する記事を全く無視する。ここには、ペルシア王 Cambyses (529—522 B.C.) とこの地を支配していたアラビア王との交渉が記され、又後世のナバテア人と關係のある文化現象も現れていて、既に Clermont-Ganneau, E. Littmann, J. Cantineau 等の横威者によつて論じられていたのである。⁽¹⁶⁾

しかしながら、報告書としての上記 Bulletin の諸篇では、Glueck もこれ程聖書を引きあいに出すわけではない。そこには上記の如き identification の基準となすべき當時の社會構造の基本的問題の一つ——定住民の集落と農耕技術の灌漑による結びつき——が中心問題として扱われている。しかし、ここでも又、上記のような聖書考古學の缺點に陥らざるを得なかつた Glueck の方

法的誤りが最近の Philip Mayerson 二つの論文⁽¹⁷⁾によつて明らかにされている。

(iii) Glueck の報告の結論は、農耕のためにネゲブ地方の定着民が涸河の河床を耕地化 (terracing) しはじめたのは、西紀前三千年紀以來のことであるが、それが貯水槽などをもなう大規模な水利設備になつたのは鐵器時代 (II) であり、最後にナバテア人の時代に至り、この民族の天才によつて「ブドウ塚」(teleilat el-'anab) と命ばれる科學的な水利方法が確立した、と云うのである。Mayerson はこの説明に對して、對案を主張し、その見解の相違を Glueck の考古學的方法の缺點に歸した。

Glueck は「ブドウ塚」自體はブドウ栽培用ではなく、丘陵の斜面からの雨水の流下を制御し、下方の涸下のブドウ畑の灌漑を行うためのものとしたのに對し Mayerson はそれは文字通り斜面でのブドウ栽培の遺跡であり、下方の涸河の河床は季節的に氾濫するからブドウ畑はあり得ない、と主張した。⁽¹⁸⁾ この點について、一九五九年初頭にヘブル大學 (ここの學者達は Glueck 說又はそれに近い説をとる) とイスラエル國土保全省とが、「ブ

ドウ塚」が雨水の流下にとつて有利であることを證明しようとして實驗を行つた。⁽¹⁹⁾ これは Glueck が自説の裏付をしてくれるものと期待した實驗であつたらしいが、結果は否定的であつた。Mayerson は更に、もし逆の結果が出たとしても、當時の百姓がそのような比較の結果を知つていた筈がないのだから、それは證明としては無効であり、むしろ當時や現代の同じような條件の風土の地方で、人々がどのようにに農耕生活を營むかを比較検討すべきである、と主張した。⁽²¹⁾ 「類似の地勢的・風土的特性をもつた世界の他の部分との對比によつてか、當該地方の現在の耕作法によつて裏付されることのない場合にはネゲブ地方の諸遺跡の機能についての考察は空想的なものとしか考えられない。」⁽²¹⁾ 次に、Mayerson は Glueck の遺跡の認定や年代決定が粗雑な點を指摘し、後者が自分と Woolley, Lawrence, Fritz Frank 等の先驅者との相違點として誇る出土陶器による年代決定も、それと農耕遺跡とが必らずしも結びつかないこと、又後世のベドゥインたちが遺跡に手をつけて、別の目的に使用している事實もあることに氣づかないでいること、等をあげ、以上のような缺點がナバテア時代に近代的な水利學と土木

工學が發生したと考ふるようにさせ、ナバテア人が他に類例のない科學的天才民族であり、そのヘラクレス的事業によつて荒地を田園都市に變えたと云うようなロマンチックな空想を生み出したのであると批判した。Mayer-son 自身は、そう云うわけで、農耕遺跡の年代決定にはやはり文献的資料を併用すべきことを説き、それによれば、ネゲブ地方は常に沙漠周邊の荒地であり、その農耕は序々にしか生産性を増大しなかつたこと、又パピルス文書は西紀六・七世紀のネゲブ地方の土地は大部分零細な私有地であつたことを示すので、中央政府は最初から組織的な農耕に關心がなかつたように見えること等を主張する。これ等の Mayerson の説明は、少くとも初期ナバテア王國に於いては農耕は二次的であり、その基盤は最初から東西間の經濟交流を利用した貿易經濟であつた、と云う私の上記論文の主旨を支持するように見える。

〔註〕

- (1) その結果は The Wilderness of Zin (1915) なる著作にまとめられた。中野好夫著、アラビアのロレンス、岩波新書、二〇頁以下参照。

批評と紹介

- (2) Rabinowitz の資金による。この人物はリトワニア生れで、アメリカで産を成した實業家であつたが、一九四九年以來、Glueck の屬する American Schools of Oriental Research の理事の一人として學問を後援した(一九五七年死去)。本書はこの人に捧げられている。cf., W. F. Albright, Louis M. Rabinowitz in Memoriam, BASOR, 146 (1957), pp. 1—3.
- (3) 史學、三三の三・四・一八七頁、註一二参照。
- (4) 初版は一九五九年 (Farrar, Straus and Cudahy) であるが、翌年 Evergreen Encyclopedia (Globe Press) の一冊として出た。本書評は後者によつてゐる。
- (5) ネゲブ地方以外では、トランスヨルダンの發掘に大きな成果をあげ、そのレポートは Annual of the American Schools of Oriental Research, XIV (1934), XV (1935), XVIII-XIX (1939), XXV—XXVI, XXVII—XXVIII (1951) に出ている。又 The Other Side of the Jordan, 1940 なる著書がある。
- (6) cf., R. Dussaud, La Pénétration pes Arabes en Syrie avant l'Islam, 1955, p. 18.
- (7) これは Albright の學派の一般的な態度であり、本書の書評で Albright が評價するのと同じ。この點については "author's enthusiasm" による。BASOR, 156

- (1959), p. 42.
- (8) その際の興味ある事情について、本書一六六一—一六八頁参照。
- (9) 上掲の史學の論文参照。
- (10) “Is the Bible Correct?” pp. 30—38.
- (11) 「ネゲブ地方の多くの場所を訪れ、踏査すると、時間的な年代の境界線は消え去るようであった。過去のパノラマが我々の意識の中で、現在の光景とだけ合った。そこで起つた過去の出来事は我々自身の自我の實體の一部であつた……」本書、一八頁。又、三七頁参照 (“to relive their past”)。これは、單に Rabbi の情熱とばかりは云へない。Albright も本書のそのような面を賞讃している (“a past that does not seem so remote after all” — BASOR, 156, p. 42.)。
- (12) 最近唱えられた *Bright, Saggin* 等の “probability-theory” も、このよきな聖書考古學を學問たらしめるための理論的武装にすぎないように思う。三笠宮殿下、國學院大學神道宗教、二四 (昭三六) 一—一四頁参照。
- (13) 例えば、天孫降臨が高千穂の峰々に行われたと信ずるところは自由であるが、歴史學の對象はそれを何かの證據で identification するとは別のところにある。Glueck の本書では、このような初歩的區別をな行われていない。
- (14) 歴史學と考古學、一一五—一二三頁参照。
- (15) 三笠宮殿下、上掲論文参照。
- (16) cf. Dussaud, op. cit., p. 46.
- (17) 本書が出版される以前に、「ブドウ塚」の解釋について Glueck を批判した論文として BASOR, 153 (1959, 2), “Ancient Agricultural Remains in the Central Negeb: The Teleilat el-Anab.” その後、Glueck は本書を出し、一方、BASOR, 155 (1959, 10), “An Aerial Reconnaissance of the Negeb” を發表したが、回答にはわずかしかちつていない。それに對し、Mayerson は更に BASOR, 160 (1960, 12) より、方法論や年代決定の基準の點まで検討を推し進めた。
- (19) この點の諸説については、史學、上掲論文参照。
- (19) Mayerson, BASOR, 160, pp. 28 f.
- (20) Glueck, BASOR, 155, p. 6, n. 9.
- (21) Mayerson は地中海世界や南アラビアの荒地の例を古今について比較している。
- (21) BASOR, 160, p. 32.
- (22) 例えば、西紀後六世紀の Antonius Martyris, Itinera Hierosolymitana (イェルサレム巡禮記) でも、ネゲブ

地方は“*eremum*” (←*erēmos*. Gr. 荒地) と記されている。

(23) 即ち、“Nabataean-Byzantine” と云う考古學的年代のうち Glueck は前半 (西紀前第二世紀から西紀後一〇六年) を “most flourishing period” とするのに対して、Mayerson は後半に最盛期を見ている。

陳荆和編 阮朝硃本目錄 第一集 嘉隆朝

ヴェトナム近世史という比較的開拓のおくれている分野の研究に先鞭をつけ、既に多くの業績を發表しておられる陳荆和氏によつて昨年 (一九六〇年四月) 表記の目錄が出版された。

これは、同氏が、順化大學と臺北の China Council For Eastern Studies の委囑を受けて着手されている仕事の成果の一部であるが幸いにして、同氏の御好意により一本が本塾東洋史研究室に寄贈されたので本書出版の経緯や構成等について記し、本書の紹介を試みてみたい。

本書は 1. Preface 2. Acknowledgment 3. Introduction to the Imperial Archives of Nguyễn 4. Appendix; List of 《Châu-Ban》 5. Catalogue of the Imperial Archives of Nguyễn という構成からなつてその1から4までは英語・ヴェトナム語の兩語で書かれ、5の目錄の部分は漢文とヴェトナム語とが對照されている。

順化大學學長 Cao-Vân-Luân 氏の序文によると同大學は一九五九年七月、National History の研究を科學的に發展させるという使命を果すために、多くの歴史家を招いてヴェトナム史料翻譯委員會 (The Committee for the Translation of Vietnamese Historical Sources) を設立して國民的な歴史に不可欠な文書を蒐集、分類、翻譯するという事業を推進